

井草観音堂民間信仰石造物



- 〔登録年月日〕平成五年一月一日  
〔種別〕有形民俗文化財（信仰）  
〔名称〕井草観音堂民間信仰石造物  
〔点数〕二基  
〔所有者等〕三宝寺  
〔所在地等〕井草一―三一―四（井草観音堂内）

## 井草観音堂民間信仰石造物

この石造物二基は、観音堂に安置されている。もとこの付近が下井草村字久保と呼ばれていたので「久保の観音様」として親しまれていた。二石仏は、いずれも区内では古い造立に属する寛文七年（一六六七）の銘を持ち、如意輪観音は「厄除け観音」、地藏菩薩は「子育て地藏」として信仰を集めていた。両像は当初から一対として造立されたため、寸法もほぼ同じであり作風も同一である。武蔵国多摩地方では寛文以前の民間信仰の石仏は比較的少なく、かつこのように両像一対のものは珍しい。

地藏菩薩像にみられる銘文の「同行十六人」とは、字久保と字向井草の一六軒の農家の人たちが講中をつくり淨財を出し合って造立したことを意味すると考えられる。この「同行十六人」と如意輪観音像の女性名を示すと思われる銘文の人名数はほぼ一致するので、如意輪観音像も同一の集団によって造立されたものであることがわかる。おそらくこの集団は女性だけのもので、観音講もしくは地藏講を結成していたものであろう。堂内の明治三〇年（一八九七）九月二八日付の井草観音堂と講中の人々を描いた絵馬から、当時の盛んな供養の様子が窺われる。また明治三七、八年（一九〇四、五）の日露戦争の頃赤痢がはやったが、両像の供養をしたところ次第に病勢が収まりさらに信仰が盛んになったと伝えられている。また昭和初期まで双盤念仏と呼ばれる講があり、双盤

という大きな鉦と太鼓を叩きながら講中の各家を供養して回った後、観音堂で百万遍念仏供養が行われた。

【文化財所在地】

